宿場町
ひらかた

第８０号

発　行
宿場町枚方を考える会
会長　堀家　啓男
072-892-5504

事務局
枚方市出口２丁目6-6
上野幸夫　072-832-5722

編　集　広報委員会

主な内容

○日本の名城を訪ねる（2頁～5頁）
○万年寺山周辺散策の記（6頁～9頁）
○枚方大橋の架橋（10頁～13頁）
○皇極天皇、雨乞いに成功（14頁～15頁）
○出石・福知山を学ぶ（16頁～18頁）

宿場町枚方を考える会
結成30周年記念事業に向け
実行委員会を設置

来年、宿場町枚方を考える会は結成30周年を迎えます。この記念事業に向け、「30周年記念実行委員会」を設置し、特別事業について検討することになりました。

本会は、昭和60年3月21日、三矢町の浄念寺において結成総会を開きました。枚方宿を顕彰し、後世に伝えていくという熱い思いが結成の原動力になっていました。結成30周年は、設立以降の多くの諸先輩、会員、歴代役員のご尽力、そして関係諸団体のご支援、ご協力の結果であり、感謝の30年でもあります。

結成25周年だった平成22年は、北大阪商工会議所において記念式典を開催、さらに京都橘大学名誉教授の猪熊兼勝さんを講師に記念講演会を開催しました。

講演中の猪熊京都橘大学名誉教授

結成30周年記念事業も、こうした前例を参考に特別事業を実施する予定です。個々の催事については、会員はもちろん、広く市民の皆さんにもお知らせします。

会員募集中

本会は、年数回の講演会やバスを利用した他宿場などの日帰り見学会、会誌を発行しています。会費は月３００円。ご希望の方は村次信子まで。電話（８９１）６１６２。

日本の名城を訪ねる

船橋本町　上谷　勝己

3月20日、枚方宿地区まちづくり協議会（事務局・市都市整備推進室）が、まちづくり研修として彦根市を訪れました。私も本会の派遣役員として参加させていただきました。彦根といえば、当然ながら彦根城、ここでは彦根城について考察してみました。

彦根城

国宝・彦根城は、平成4年（1992年）に世界遺産の暫定リストに登載されています。昭和27年（1952年）に特別史跡に指定された彦根城は、江戸幕府の重鎮・井伊家の居城で、250年余りにわたって平和を維持した武家政権の拠点の一つです。

「武威の象徴」である天守や櫓だけでなく、「権威を演出する舞台」であった御殿や、広大な大名庭園が現存・復元されており、近世城郭の骨格をなす各種施設が今日まで伝わっています。このような資産を核として世界文化遺産への登録を目指しているのです。

世界遺産とは、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）に基づく世界遺産リストに登録されている遺跡や建造物、自然などのことです。これらは人類全体の財産として、国際的に保護・保全することが義務付けられています。

彦根城には、天守を始めとする城郭施設や御殿・庭園という武家政権と、大名文化を象徴する各施設が良好な形で残っており、これらは世界に誇る資産として、後世へ守り伝える必要があります。

彦根城天守閣

慶長5年（1600年）、天下分け目の関ヶ原合戦から2日後、西軍の総大将・石田三成の居城・佐和山城が総攻撃を受けて落城しました。翌、慶長6年正月には、のちに徳川四天王の一人として称えられた井伊直政が佐和山城に入

城しました。ところが直政は関ヶ原合戦で受けた鉄砲傷が悪化して翌年に死去しました。直政より後事を託された家老木俣守勝は、城の移築計画を徳川家康に諮り、佐和山・彦根山・磯山(米原市)の三山を候補とし、その中から彦根山への移築を決定しました。

慶長9年(1604年)7月1日、佐和山城の西方約2kmの彦根山において新たな築城工事が始まりました。築城にはおよそ20年を要し、前期工事は主として城郭主要部に力が注がれました。幕府から6人の奉行が派遣され、近隣諸国の大名には助役が命ぜられるなど、天下普請で築城工事が行われました。

大坂城を始め、豊臣恩顧の大名が多い西国の抑えの拠点として意識され、その完成が急がれました。後期工事は、大坂の陣によって豊臣勢力が一掃されたのちに再開されました。彦根藩の単独で実施され、城郭施設とともに城下町を含む総構えがほぼ完成しました。

17世紀初頭に天下統一が成し遂げられ、江戸幕府が成立し、天下が太平になると、城郭の中心は天守から御殿へと移行します。御殿では藩政が執り行われ、藩主が日常生活を送りました。年始・五節句における家臣の出仕など武家儀礼が多彩に展開され、能や茶の湯などが催されました。彦根には藩庁の機能を持った表御殿のほか、槻御殿(玄宮楽々園)、お浜御殿が造営され、250年余り続いた平和な武家政権の下で、御殿を中心とした大名文化が華開きました。

4月9日からは旅行社の信州五名城「桜の風林火山」2日間のツアーに参加しました。

高遠城址公園、松代城跡、小諸城址懐古園、上田城跡公園、そして国宝・松本城の5城です。

高遠城址

まずは、国指定史跡・日本百名城の高遠城址です。

高遠は、古くは諏訪氏の勢力圏にありましたが、戦国時代には武田信玄がこの地を抑えました。このとき、高遠城の改築に係わったのが山本勘助だと伝えられています。

天正10年(1582年)、高遠城は織田軍に攻められ落城しました。江戸時代になると、高遠城は高遠藩(石高3万3千石)の政庁として、保科氏、鳥居氏、内藤氏と、約270年間にわたり上伊那の政治の中心になりました。現在の高遠城址は、江戸時代の曲輪配置をそのまま残しております。その価値が認められ、昭和48年に国の史跡に指定されました。平成18年には日本を代表する歴史的名城として、(財)日本城郭協会から「日本百名城」の一つに選ばれました。

1500本以上のタカトウコヒガンザクラは「天下第一の桜」と称されていますが、城の南で三分咲きでした。古いものは樹齢百年を越えるものがあり、県の天然記念物に指定されています。

現地案内図(部分)

松代城跡

日本百名城の一つ、松代城は海津城とも呼ばれています。武田信玄が上杉謙信と戦うため、その拠点として築かせた城です。

松代城の本丸

その後 城主の交代があり、元和８年（１６２２年）には真田信之が上田城から移封されてきました。以来、真田氏10代が城主となりました。

国の史跡に指定されており、城門・石垣なども復元され、往時をほうふつとさせる姿によみがえっています。春は桜の名所として賑わいますが、桜の蕾はとても固かったのが残念でした。

小諸城址懐古園

小諸城址も日本百名城の一つです。木曽義仲の武将・小室太朗光兼が館を築きました。その後、大井光忠親子が鍋蓋城・乙女城・別名白鶴城を築きましたが、武田信玄の攻略により落城しました。信玄が、山本勘助・馬場信房に命じて築城し、酔月城ともいわれています。

その後 織田信長の武将・滝川一益、徳川家康の武将・松平源十郎康国が城主になり、さらに仙石秀久親子が現在の小諸城を完成させています。

その後、城主は、徳川・松平氏など6氏に変わり、元禄15年（１７０２年）、牧野氏が入り、10代続きました。

小諸城址懐古園

この城の特徴は、全国的にも珍しく、城下町より低い穴城です。地盤が浅間山の火山灰でできているため、崩れやすい断崖で、かえって堅固な要塞となっています。

明治13年（１８８０年）に神社を祀り、懐古園と呼ぶようになりました。島崎藤村は明治32年（１８９９年）4月、かつての恩師・木村照二に招かれて小諸義塾の教師として赴任、以降小諸で過ごした7年間に「雲」「千曲川のスケッチ」「落梅集」「旧主人」などを生み，大作「破戒」を寄稿しています。ここでも桜の蕾は依然として固かったのですが、千曲川の水音は微かに春の訪れを告げていました。

上田城

上田城は真田氏の居城です。長野県の東に位置する上田は、中央に日本最長を誇る千曲川が流れ、菅平、美ヶ原の雄大な二つの高原に囲まれた歴史と文化の町です。信州の政治文化の中心として１２００年余の歴史が脈々と流れ続けています。信濃国分寺の創建以来、現在まで仏教文化のパイオニアであり、奈良・鎌倉時代に建てられた文化遺産が今もなお、数多く残っています。

戦国時代の天正11年（1583年）、真田氏の居城として築かれた平城で、徳川の軍勢を二度撃退した歴戦の名城として知られ、幕末まで城主が幕府の老中などを務めました。

上田城

上田城の千本桜まつりが開催中で、山桜としだれ桜も満開で、この旅で初めての花見ができました。城内では若者たちが真田十勇士に扮して、観光客をもてなし、記念撮影に協力してくれました。

松本城

松本城は戦国時代の永正年代（1504年～21年）初めに造られた深志城が始まりです。戦国時代になり、世の中が乱れてくると、信濃府中といわれた松本平の中心、井川に館を構えていた信濃の守護小笠原氏が、館を東の山麓の林地区に移すと、その家臣らは林城を取り囲むように、支城を構えて守りを固めました。深志城もこの頃 林城の前面を固めるために造られました。その後 甲斐の武田信玄が小笠原長時を追い、この地を占領して信濃支配の拠点としました。その後 天正10年（1582年）に小笠原貞慶が、本能寺の変による動乱に乗じて深志城を奪還し、名を松本城と改めました。

豊臣秀吉は天正18年（1590年）、小田原城の北條氏直を下して天下を統一すると、徳川家康を関東に移封しました。この時 松本城の小笠原氏は家康に従って下総へ移ると、秀吉は石川数正を松本城に封じました。数正・康長父子は城と城下町の経営に力を尽くし、康長の代には天守三棟（天守・乾小天守・渡櫓）を始め、御殿・太鼓門・黒門・櫓・塀などを造り、本丸・二の丸を固め、三の丸に武士を集め、また城下町の整備をすすめ、近世城郭としての松本城の基礎を固めました。天守の築造年代は康長の文禄2年から3年（1593年～4年）と考えられています。敵の侵入を頑なに拒む、天守閣の狭い急な階段を登りました。そこには城下町全域を見渡す望楼がありました。戦の時は、戦況把握・分析、そして重臣・参謀たちとの戦いの作戦会議・軍議を開いた部屋がありました。天守閣・望楼から見下ろす城内の堀端のしだれ桜は、見事な満開で、平和そのものでした。「終わりよければすべてよし」です。

松本城

今回は国宝4城の内、彦根城（滋賀県）と松本城（長野県）を紹介しましたが、次回は世界文化遺産の国宝姫路城（兵庫県）と国宝犬山城（岐阜県）を紹介したいと思います。

万年寺山周辺散策の記

門真市　辻他 久雄

柔らかな陽が射す穏やかな春の半日、「近郊の史跡を訪ね歩く」と題して、万年寺山周辺を散策しました。

4月3日の午前中、会員など一行23人が枚方公園駅・西改札口に集合し、本会の副会長で、枚方観光ボランティアガイドでもある上谷勝己氏の案内のもと、有意義な時間を過ごすことができました。

枚方公園駅から少しばかり線路に沿った道を歩けば、まもなく右手高台にある臺鏡寺の長い石段が見えてきます。5月には、つつじの鮮やかな紅の花が、長い階段に沿って咲き乱れ、京阪電車の車窓からも眺めることができ、目を楽しませてくれます。

臺鏡寺の参道

最初の踏切を渡れば、願生坊、大隆寺などの歴史ある寺院が甍を並べ、旧家の門構えの残る家並みが続いています。この辺りは、旧枚方寺内町が

あったところでもあります。「蔵之谷」と呼ばれる地名が示すとおり、緩やかな坂道が万年寺山、意賀美神社へと続き、枚方の歴史を感じさせる私の好きな道の一つです。

枚方八景の一つ、「万年寺山の緑陰」の中にも登場するほど枚方観光の名所の一つでもあり、定番中の定番の場所で、訪れた方も大勢おられることかと思います。

淀川沿いに細長くのびる旧枚方宿の街並みを眼下に見下ろし、こんもりと緑に包まれて突き出た丘が万年寺山です。摂津・丹波の山々や、豊かな淀川を一望に見渡せる風光明媚なこの丘は、京阪二都のちょうど中間にあり、数々の歴史の舞台となってきました。

この丘の上の意賀美神社境内には、古墳時代前期に築かれた万年寺山古墳があり、青銅鏡が8面出土しています。寺の縁起では、推古天皇の時代高麗の僧・恵灌が、この地の風景の勝れているのを愛で、眺めが唐の林岸江に似ているとして、草庵を営んだのが万年寺の始まりです。

夕暮れを告げる晩鐘は人々に親しまれてきましたが、明治の神仏分離令により廃寺となり、仏像などは三矢の浄念寺に移されました。今も参道の石段横に「長松山萬念寺」と刻んだ石柱や十三重の石塔が苔むしており、往時を偲ばせてくれます。(二〇一一年発行ひらかた歩っぽ・枚方八景ガイドブックより一部抜粋)。

時として歩き慣れた道が、見慣れた風景が、新鮮なものに変わることがあります。今まで知らなかったささやかな驚きと感動がそこから生まれることがあります。そんなことを感じさせてくれる半日となりました。そういうわけで、今回は私の心に残ったことを中心に書いてみたいと思います。

まず、最初に訪ねたのは意賀美神社です。何回か訪れたことはありましたが、今回は宮司さんの案内により境内にある参集殿を見学させていただきました。

ここで私の目に留まったのは、縦83センチ・横105.8センチ・枠幅10.3センチもあり、四隅を飾り金具でとめた重厚な「算額」でした。

算額とは、神社・仏閣の拝殿や絵馬堂に奉掲されている数学の絵馬をいいます。算額は江戸時代に、研究発表の手段、あるいは難問が解けた喜びや感謝、さらには数学者としての上達を祈念する願望を込めたものとして、社寺に奉納されたものです。現存する算額は日本中で約820面、近畿地方では86面、北河内には枚方の意賀美神社と四條畷の国中神社の貴重な2面があります。

ここ意賀美神社にある算額は、文久元年（1861年）に、北摂の麻田（豊中市蛍ケ池）に住む岩田清庸によって奉掲されたものです。その算額の末尾の文から、清庸が当

地の縁故を頼り、病気療養のために滞在し、その病が回復したお礼として、算額に描いたような問題を解き、奉納したと推測されます。この算額は平成８年に枚方市の指定文化財に登録されています。

西欧の微分積分などの高等数学に匹敵する和算が江戸時代において、民間学者の間で広く行われていた事実として、数多くの算額に見ることができ、「恐るべし、江戸時代の理系日本人」という思いがひときわ募る思いがするのは私だけでしょうか。

意賀美神社を後にして府指定天然記念物になっている椋の木を見学しました。

その後に訪れた万年寺山にある、現在は見晴らしの良い公園に整備された御茶屋御殿跡では、今日の案内をしてくださっている上谷勝己氏から眼下に見える淀川の歴史や、ともに歩んできた枚方宿の歴史について詳しく話を聞くことができました。

御茶屋御殿跡から見た淀川

また、つい最近の平成25年9月16日、各地に大きな被害をもたらした台風18号による淀川増水の様子についての話も伺いました。ご自分で撮影されて写真や資料をもとに、詳しく話をしていただき、今さらながら淀川とともに生きてきた先人たちの知恵や苦労やらを想像するとともに、歴史の重さなどを感じずにはおれませんでした。

さて、今回の散策での楽しみにしていた大隆寺の住職、株橋祐史氏の講話、寺内町枚方「大隆寺と信長」の話に筆を進めたいと思います。

天文元年（１５３２年）に山科本願寺が焼き討ちにより焼失したため、本願寺は大坂石山に移りました。枚方寺内町も、これに伴い建設された寺内町の一つと推測され、浄土真宗の寺院である順興寺を紐帯とする自治的な町が形成されていました。

順興寺の創建年代は明確にはわかってはいませんが、天文12年（１５４３年）に記された『天文日記』にはその名が見え、永禄２年（１５５９年）には蓮如の第27子の実従（１４９８年～１５６３年）が入寺して町を整備しています。実従が残した日記「私心記」によると、枚方寺内町は「蔵之谷」「上町」「下町」の三つの町で構成されており、周囲は丘陵や人工の土塁や堀で守られていたようです。寺内町には、紺屋や油屋、味噌屋、鋳物屋、質屋といった商人や職人が集住し、淀川の三矢浜を流通拠点とした活発な商業活動が行われていたとみられています。

今回お話を聞かせていただいた大隆寺は、天正３年（１５７５年）８月、京都の本能寺・尼崎本興寺第十二世日承聖人によって開創された法華宗の寺院です。同じ法華宗の寺院でもあり、織田信長が明智光秀によって討たれた京都の本能寺とも深い関係があったことなど、住職さんの講話

からもよくわかりました。また、信長が本能寺（法華宗の寺院）を京都での宿泊場所にしたのも、法華宗の布教ルートと南蛮貿易のルートが似ていて、商工業者や港町の豪商の多くが法華宗の信徒であったことから、鉄砲の入手と独占を意図したものであったのだろうという話も興味深く聞くことができました。

大隆寺の山門

大隆寺の本堂増築工事に伴う文化財発掘調査では、枚方寺内町の油屋と見られる遺構が発掘され、その存在が確認されています。

これは、平成14年5月末に発見されたもので、備前焼の大甕が一列に6個（西端列のみ5個）、4列分。これと離れて1個、合計24個が出土しています。大甕の大きさは高さ95センチ、胴回りは一抱えもある大変大きなもので、2石入り（一升瓶200本分）であるとのことです。

本堂には、その時の発掘の様子や掘り出された大甕の写真が展示されていました。大甕の隣に立って一緒に写っている女性との比較からもその大きさには驚かされます。また、発掘の状況から、大甕の中には石が残っており、石で割った跡があることからも、人為的に割られたことが推測されます。また、甕の中に残っていた成分から、当時の油が「荏胡麻」だったこともわかっているそうです。

発掘された時の様子や感動が、次から次へと株橋住職の口から私たちに伝わってきて、本当に時間が経つのを忘れて聞き入っていました。

大隆寺の株橋住職

興味あるそれらのお話の中で、強く印象に残った言葉をノートに書き留めておくことにしました。それはこのようなお話でした。

「歴史というと、何か遠い昔のことのような気がするけれど、今自分が立っている地面が、その時代の地面かと思うと、その時代の時間を自分自身が共有できたという思いがして、何かしら不思議な気がして、とても感動したことを覚えている」。

今から450年ほど前、信長が生きていた時代、枚方寺内町で暮らしていた人々の息遣いが聞こえてきそうな気がしました。

どんなことを日々考え、人と人の繋がりを築きながら生活をしていたのか、そんなことを思いながら家路に着きました。

〈参考資料・文献〉

式内意賀美神社略史（意賀美神社崇敬会）、ひらかたの歴史（枚方文化観光協会）、図説北河内の歴史（郷土出版社）、資料「大隆寺と信長」（大隆寺住職株橋祐史）。

「朝日新聞記事集成」に見る

枚方大橋の架橋

交野市　堀家　啓男

治水から交通へ

明治18年（1885年）の淀川、伊加賀切れの洪水など甚大な被害にこりた政府により、治水対策として淀川改修工事が漸次すすめられます。

明治42年（1909年）6月1日に改修工事の竣工記念式が毛馬の閘門付近でおこなわれ、治水への安堵の気持ちがでてきたのか、交通への関心が高まりだし、明治42年（1909年）5月20日付、「北河内の枚方ほど交通不便の地を見ざれば…」ということで、翌年の春に開業する予定の京阪電車の開通に合わせて「枚方大橋建設の内議」という記事が初めて「朝日新聞記事集成（枚方市発行、以下『集成』と略します）第4集」に表れます。

明治43年（1910年）4月15日、予定より半月遅れで、京阪電車が開業され、大阪、京都間は便利になりましたが、対岸、三島間との交通の不便さは続きます。しかし、京阪電車と地元枚方がタイアップした淀川での、三十石船やくらわんか舟の運航、鵜飼の実施などの「観光くらわんか」が、堤防や河川敷を利用して数年にわたり展開されたこともあり、しばらくは大橋に関する記事はありません。

大正9年（1920年）になって「集成」第5集に「淀川架橋問題の再燃」の記事がでています。大正末期にかけてさらに機運が高まり、「集成第6集」には、大正13年（1924年）9月3日付で北河内、三島両郡の関係者が北河内郡役所で会合、架橋の陳情について協議を重ね、経費節減のため、阪神国道竣工に伴い、不用となった西成大橋を

洪水を伝える明治18年洪水碑

再利用すれば340万円で済むとの内容で陳情書を作成したということです。

陳情書は9月14日、大阪府に提出されました。大阪府もその必要性を認め、具体化に向けて検討していると、11月15日付で伝えています。地元では、少しでも早く架橋が実現してほしいという気持ちから、経費を安くあげるため、ここでも不用となった橋の再利用の提案をしています。

架橋運動

高槻工兵隊や京阪電鉄の協力申し出もあり、地元の架橋運動が盛り上がります。

大正14年（1925年）7月31日付には「淀川架橋に高槻工兵隊の協力」という記事があり、旧高槻城内におかれた第4師団第4工兵大隊（昭和11年には工兵第4連隊）が、架橋訓練として「架橋材料さへ提供されるならば工兵隊は全機械と全労力を無償で提供して、架橋工事をおこなってもよい。（略）」と述べ、また便宜のためにも架橋が必要とも述べたとしています。高槻工兵隊は、高槻町などの誘致運動もあり、明治41年（1908年）に京都から旧高槻城跡に移転、大隊として独立したばかりで、意気軒昂だったと思われます。

「集成　第6集」、大正14年（1925年）10月10日付ではさらに、地元にとって都合のよい話がでてきます。

「淀川架橋で京阪電鉄の鉄橋無償譲渡の申入れ」です。

大正14年（1925年）10月10日付　三島・北河内間の架橋問題、鉄橋譲り受か。

「（略）京阪電車が京阪間の2両連結運転を企てたので、木津川および宇治川に架した2鉄橋が不用となり、次第によっては無償で譲渡してもよいとの好意を早川枚方町長までもらした。右2鉄橋の長さは300間以上で、大塚・枚方間300間には持つて来いの代物で、かつ運搬は淀川出水期を利用し、流して運ぶことができ、経費の上に半ば以上の節約ができるので、同町長も大いに喜び直ちに府に通知するとともに（略）」

この話はたいへん有望なものであったようで、10月25日付では、府において架橋場所を、三矢・大塚間の渡しの場所とするか、下流の桜新地・番田の針金渡しのある場所とするか、2鉄橋の運搬費5万円の工面ができるかなど、具体的に架橋を検討し、他県から京阪電鉄に2鉄橋買収の引き合いがあるため、結論を急いでいるとしています。

12月1日付では、さる11月に枚方町で淀川架橋期成会（ママ）を組織し、事務所を大字三矢の専光寺におき、さらに関係町村に行脚を始めたとあり、12月16日付で、枚方町の淀川架橋期成同盟会が中心となり、北河内は枚方町など13町村、三島では高槻町など11町村の賛成を得、12月11日、連署して架橋請願書を府へ提出、また架橋の場合は高槻工兵隊も相当の援助をする意向としています。

大正15年（1926年）1月29日付では、京阪電鉄の重役会が、両鉄橋の解体および運搬料として、5万円で大阪府に譲渡することを決めたとしています。

これ以降、しばらくは府内

部での議会対策や準備作業がすすめられたようです。

枚方大橋の誕生

ほぼ1年後、大正15年（1926年）12月1日付　大阪府が「淀川架橋費を予算に計上」として、淀川架橋を16年度からの3ヵ年の継続事業とし、初年度の費用8万円を計上、府議会に提出と報じています。

12月18日付「淀川架橋の場所決定」。

「（略）淀川架橋予算44万8000円は、16日終了の府会で通過し、いよいよ架橋が実現することになった。架橋位置については（略）水流その他の関係上、府土木課ですでに研究調査済みの、枚方町桜新地裏・大冠村大塚間に決定したと」。

12月25日に大正天皇が崩御、同日昭和に改元されます。

（注　昭和元年は7日間）

昭和2年（1927年）10月12日付、「枚方大橋の設計完成」。

この記事が出てからさらに1年以上経ちます。この間に、京阪橋梁の下流への運搬や工兵隊による仮橋架橋が行われたのでしょうか。これらに関する記事はみあたりません。

昭和4年（1929年）3月5日付、「枚方大橋架橋工事開始」「集成　第7集」。

「（略）過般入札の結果大阪の森組と松尾鉄筋橋梁会社とが請負ふことに決し、いよいよ3月4日午前10時から枚方警察署横の淀川堤で起工式をあげると。（略）橋はプラット・トラス式で長さ2278尺、橋梁11連、幅員23尺（略）森組が上下部工事を引受け（略）松尾工場が（略）上層部鉄骨工事を行ふと」。工事は民間会社で行われたようで、工兵隊の協力については一向に報じられていません。

3月4日、枚方大橋の起工式と地鎮祭が行われ、正午すぎには閉式、続いて枚方楽園で祝宴を催したとあります。

工事は順調に進んだようで、それからほぼ1年6ヵ月後の昭和5年（1930年）9月6日付、「竣工間近の枚方大橋」が出てきます。

「架橋工事は9月末に竣工予定で、昨年4月起工してから工事は順調に進み、橋柱の成ったのは本年2月、鉄筋外形の出来上がったのが7月、鉄筋コンクリートの床板工事も1両日中には成る。6日からは最後のアスファルトブロック舗装工事にかかる予定で、9月末までには全工事の竣工となり、10月初旬に竣工式が行われる予定で、総工事費は56万6456円である」としています。

10月9日付、「渡り初め式は10月10日に行われる（略）午前10時から枚方町新地裏広場で三百五十名を招待して、府主催の竣工式を挙げ、式後、枚方・大冠両小学校生徒約千六百人が渡り初めをし、11日には同場所で町主催の祝賀会を催す（略）」。

昭和5年（1930年）10月1日「枚方大橋竣工祝賀の歌」。

「（略）渡り初めの際に小学校児童の祝賀唱歌が、寝屋川高女教諭で歌人の今中楓溪氏によって作られました。

一．竜ともまがふ大橋の
　かかりしさまの雄々しさや
　澄みたる空に旗ふりて
　今日をめでたき渡り初め

二、年久しきもいのりたる
新よそほひの大橋や
山々近く色見する
今日をうれしき渡り初め
（曲は浦島太郎の作りかへの曲）

10月11日付「枚方大橋の開通」。

「枚方大橋渡り初め　秋日和のけふ。

大阪長柄橋から淀川を上流8里、摂・河の両野をつなぐ物資輸送の重要な役目をもった枚方大橋が竣工し、秋日和の10日渡り初め式を行った。…（桜新地裏の広場で関係者、名士出席の）竣工式があり、やがて11時半枚方・高槻両小学校生千八百名は手に手に小旗をふり、奉祝歌を歌ひつつ渡り初めをなし…。近在から数万人が見物に押しかけ例のない大賑ひだった」。

かくして枚方町民ら待望の枚方大橋が誕生、北河内、三島間の大動脈として使われました。橋梁のうち、当時の本流上に架かる曲弦トラス2脚は新造され、その他の直弦トラス15脚は京阪電車から購入したものです。なお翌年の昭和6年（1931年）夏、昭和天皇の弟、秩父宮が陸軍大学学生として枚方・万里荘から高槻工兵隊に通われることになった際、ご夫妻の宿舎決定の理由の一つが、この枚方大橋の開通による交通の便だったと思われます。

それから40年、世は車社会、モータリゼーションの波が押し寄せ、枚方大橋は連日大渋滞、さらに老朽化と相まって、架け替えが決定、現在の両側4車線の2代目が完成したのは昭和46年（1971年）です。その橋もまもなく半世紀です。

現在の枚方大橋
平成26年8月7日撮影

皇極天皇は縮れ毛か

雨乞いで降雨に成功

小倉東町　平良一郎

第35代皇極天皇（こうぎょくてんのう）は、飛鳥時代の女帝です。

日本初の女帝、推古天皇が崩御の後、甥の舒明天皇（じょめいてんのう）が即位し、姪の宝皇女（たからのひめみこ／後の皇極天皇）がその皇后となりました。

この舒明天皇が崩御の後に、史上二人目の女帝として即位したのが皇極天皇なのです。

この時期の天皇には政治上の実権がほとんどなく、蘇我蝦夷（そがのえみし）、入鹿（いるか）の父子が掌握していました。

皇極天皇が即位した年（西暦６４２年）の夏、日照りが続いて、干ばつの様相を示し始めました。当然、農民は古来の雨乞い祈祷をしきりに行いました。しきたりに従って、牛馬を殺して神社に奉納し、祈りを捧げても、全く効果は現れませんでした。

この干ばつは、作物に深刻な被害を与えることが予想されました。事態を重く見た朝廷では、蘇我蝦夷大臣による直接指揮の下、すべての寺院に対して雨乞いの祈祷を命じました。彼は自らも祈りをしたが、太陽は容赦なく照りつけました。

何日続けても祈祷の効果がないために、雨乞いの読経は中止せざるを得なくなりました。このままでは今年の収穫は絶望的となります。

その2日後、突然、皇極天皇が雨乞いの祈祷をすると言い出しました。そして飛鳥川のほとりに行幸して、四方を拝し、天を仰いで祈り始めました。

すると、たちまち雷鳴がとどろき始め、雨が降り出しました。この雨は5日間降り続き、あまねく天下が潤いました。臣民は万歳を称えて、「最高に徳のある天皇」と賛美しました。

以上は「日本書紀、巻第弐拾四」の一部のあらましです。

現代の常識では、天皇が雨乞い祈祷をしただけで、たちまち雨が降るとは、考えられません。皇極天皇は雨が降ることを事前に分かっていたに違いありません。降雨の予測

をした上で、祈り始めたのだと思います。

皇極天皇だけが、どうして雨の予測ができる能力があったのでしょうか。いくら天皇だからといっても、天気予報までは及ばないでしょう。その能力は、きっと皇極天皇の持つ身体的な特徴にあったに違いありません。

雨が近づくと、気圧や湿度が変化し始めます。この微妙な変化を体感できる人は、天気の予測ができます。

一般的には、このような体感は、関節リュウマチや神経痛など、いわゆる「天気病」と呼ばれている患者に発生する場合があるといわれています。

さらに、病気ではなくても、縮れ毛の人は、天候が下り坂になると、毛の縮れが強くなるようです。

皇極天皇の場合、晩年に重祚（再即位）し、斉明天皇（さいめいてんのう）となってから後、盛んに土木事業や海外遠征などを行って、積極的に活動をしている行動力から見て、関節リュウマチや神経痛に悩まされていたとは思えません。

それよりも、縮れ毛であったと考える方が自然です。

日頃から蘇我大臣の専横ぶりを快く思っていなかった皇極天皇は、蘇我が仏式による雨乞いの祈祷に失敗した、その翌々日の朝、いつもと違う毛の縮れを感じて、雨が近づいているのを確信したと思われます。天皇の主導権を回復する千載一遇、絶好の好機と捉えたのでしょう。

そして早速行動に移しました。仏教ではなく、神道による雨乞いの祈祷に相応しいと思う飛鳥川畔へ輿を急がせました。

雨雲が発生する前に、祈りを開始しなければなりません。間に合いました。飛鳥川に着いたときは、昼下がりの太陽が激しく照りつけていたのです。すぐに四方拝の準備をさせ、全身全霊を捧げて祈りました。

突然の激しい雨に、ずぶ濡れになりながら、とどろく雷鳴の恐ろしさも忘れ、祈り続けました。

「これで我れの勝ちじゃ。如何に即位を援けてくれたにせよ、あの思い上がった蘇我父子に一矢報いる事が出来ようぞ」。

小説なら、このような描写になりそうです。

平成17年正月に放映されたNHK古代史ドラマスペシャル「大化改新」では、池端俊策が脚本を担当しましたが、このドラマの中で、皇極天皇の雨乞いの成功は、単純に神通力としか説明されていません。だが、高島礼子の扮する皇極天皇は、神通力を十分感じさせる妖艶な美しさがありました。

やがて3年後、蘇我父子は、中大兄皇子（皇極天皇の子、後の天智天皇）、中臣鎌足（後の藤原鎌足）らによって誅殺されます。いわゆる乙巳の変（いっしんのへん）です。この後、政治は豪族支配から天皇中心へと変わる「大化の改新」へと向かうことになります。

皇極・斉明天皇の陵墓は、現在のところ、諸説があってあまりはっきりしていません。

いつの日か、その陵墓が発見され、さらに遺体のDNA鑑定が行われたとすると、縮れ毛であったことが明らかになるかもしれません。それまでは、これはすべて仮説にすぎません。

バス見学会で
出石・福知山の歴史を学ぶ

三栗　石川　勲

26年度の第1回バス見学会は出石と福知山を訪ねました。6月1日の午前8時、会員など45人がラポール枚方の横から出発、名神などの高速道路を利用し、途中、休憩を挟みながら午前11時前に出石へ到着しました。

出石

行かれた方も多いと思いますが、簡単に紹介します。出石町は、兵庫県の東北部にありました。平成17年に近隣の4町とともに隣接する豊岡市と合併、現在は豊岡市の6地区の一つですが、住所には「出石町」が付いて「豊岡市出石町○○」といいます。

江戸時代は、出石藩の城下町でした。整備された町並みは碁盤の目で、その風情から「但馬の小京都」と呼ばれています。平成19年に地域の23ヘクタールが重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

城下町ですからお城があります。ただし、明治になってから取り壊されました。堀や石垣などは残っており、現在の隅櫓、登城門などは復元されたものです。

昭和43年に復元された西隅櫓

出石城という名称は、小出吉英が慶長9年（1604年）に旧有子山城を廃止し、山麓部分を出石城と命名、居城として幕府に届け出たのが始まりです。小出氏の後、松平忠周が入城しましたが、宝永3年（1706年）に転封、代わって仙石政明が入城しました。以後、明治4年（1871年）の廃藩置県まで仙石氏の居城となっていました。仙石氏の石高は5万8千石でしたが、江戸時代三大お家騒動の一つ、仙石騒動が起こり、3万石に減封されています。

バスが出石の駐車場に着くと、すでに二人のボランティアガイドさんが待っておられました。最初に見学したのは家老屋敷です。出石藩には3人の家老がいましたが、見学した市立出石家老屋敷は、仙石騒動の中心人物、仙石左京の屋敷といわれています。次頁の写真では平屋に見えます

が、不意の襲撃に備えた隠し2階があります。

豊岡市立出石家老屋敷

次に案内されたのは出石城跡です。昭和43年に復元された西隅櫓側から入りましたが、二の丸跡は高台になっており、出石の町並みを望むことができます。同じく復元された東隅櫓の横は、築城当時から鎮座している有子山稲荷神社の参道で、37基の朱塗りの鳥居が連なっています。

今や出石のシンボルといわれているのが辰鼓楼です。辰鼓櫓と書かれているのを見かけますが、楼閣なので辰鼓楼が正解です。確かにかつては櫓で、辰の刻の藩主登城を知らせる太鼓を叩く櫓でした。明治14年（1881年）に旧藩医の池口忠恕が病気平癒を感謝して、オランダ製の時計を寄贈し、時計台となったのです。

辰鼓楼

辰鼓楼を見学すると、ちょうどお昼になりました。出石といえば「そば」、これを目当てに参加したのは私だけでしょうか。昼食は出石城山ガーデンで「皿そば会席」をいただきました。

そば汁にウズラの卵を入れるそば屋さんがありますが、出石ではにわとりの卵が一般的です。出石そばは、信濃の上田藩主だった仙石政明が出石へ国替えになったとき、信州のそば職人を連れてきたのが始まりとされ、現在のように小皿に盛られるようになったのは、江戸末期といわれています。現在では約50軒のそば屋があり、関西では屈指のそば処です。

昼食を済ますと、出石を後にして福知山に向かいました。

福知山

福知山も城下町で、京都府北部にあります。戦国時代、明智光秀が当地を支配していた豪族の塩見氏（後に横山と改姓）を破り、居城の横山城を大改修し、福智山城としました。これが後の福知山城です。逆賊のイメージが強い光秀ですが、由良川改修などの功績から、福知山では愛されており、イメージキャラクターは左写真の「光秀くんとひろこ（正室）さん」です。

忍たま乱太郎の作者、尼子騒兵衛さんの作です。

江戸時代になると、福知山藩の居城となりました。初期には、次々と城主が代わりましたが、寛文9年（1669年）に朽木稙昌が入城、以後、朽木氏が13代、明治2年（1

８６９年）までの２００年にわたり統治しました。

明治４年（１８７１年）、福知山城は廃城になります。建物は払い下げられ、二の丸は明治20年（１８８７年）に取り壊されましたが、今回の見学会で訪れたときは、立派な城閣が迎えてくれました。

大天守（内部は郷土資料館）

もちろん鉄筋コンクリート造りです。三重四階の大天守、二重二階の小天守は昭和61年（１９８６年）、市民による「瓦１枚運動」などの熱意により復元されたもので、七代目の城主、松平忠房時代の絵図、図面が基になっています。

先般の豪雨により被害を受けられた福知山の皆さん、こころからお見舞い申し上げます。

新入会員紹介

二ノ丸吉紀さん　渚元町
水谷利代子さん　交野市
山口　勤さん　出口
徳田　正子さん　寝屋川市
濱本　英子さん　寝屋川市
塚根　昌子さん　香里ヶ丘
谷　萱子さん　出口
松浦　陽子さん　楠葉朝日
中城　定さん　小倉町
乾　良夫さん　門真市
梶原　進さん　楠葉丘
木戸　裕子さん　黄金野

出石城の西隅櫓を背に記念写真